「主の恵みの中に生きる」

ヨハネ黙示録3章20節

森島 牧人 牧師

先週でクリスマスシーズンが終わりました。「イエスさま、来てください」という思いで、クリスマスを待ち望んだ私たちでした。しかし今日の聖書には、自分たちは待つ側にいると思っている私たちのことを、実はずっと待っている方がおられる、つまり私たちこそ待たれている者であると書かれているのです。

私たちをお待ちになっている方、その方は二千年前に家畜小屋の飼い葉おけという最も低いところに生まれ、最終的に十字架にかかって十字架まで、底の底にまで降りて行かれた方でした。しかしその方こそが神御自身であったと聖書は語っています。主イエスという神御自身が降りて来られた、つまり神がそこまで低くなられたということが＜クリスマスの出来事＞であったということなのです。

では、その低くなられた主イエスは今どうしておられるのか。今朝の御言葉では「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」（黙示3:20）と語っています。神の御子主イエスは低く小さく生まれ、福音をもってすべての人々を神の国へと招き、さらに十字架にまで降って神の救いの御業を成し遂げられたのです。ヨハネ福音書では「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（3:16）という有名な御言葉がありますが、それはさらに「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」（3:17）と続いています。

その主イエスが今、「戸口に立ってたたいている」と今日の聖書は私たちに語るのです。なぜ戸口なのか。それは戸口こそが現代の最も低いところであり、その最低のところに主が来られているということなのです。つまりこの「戸」とは「心の戸」であり、主は私たちの心の戸をたたき、私たちがそれを開けるのを待っておられる、つまり主イエスこそ私たちを待っていてくださる方だったのです。ベツレヘムの家畜小屋に降って来られた主は、その時の家畜小屋と同じように暗く冷たく汚れた私たちの心の戸口にまで降って来て、私たちが固く閉ざしている心の戸をたたいておられるのです。

さて、私の好きな絵の一つに、イギリスの画家ウイリアム・ホルマン・ハントによる「世の光」と題されたものがあります。それには、手にランタンを持って家の扉をたたく主イエスの姿が描かれています。興味深いのは、この扉には把手がないことです。絵を見た人々から「どうやって扉を開けるのか」と問われたハントは、御言葉「見よ、わたしは戸口に立って･･･」を描いたものだと答えたと言われています。

このハントの絵と、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。･･･」という御言葉は、まさに主イエスの限りのない優しさを描き出しているのです。主イエスは私たちの心の扉をやさしくたたき、扉が開かれるのを、忍耐強く待っておられる、御自分から押し入ろうとはなさらず、御自分を押し付けようともされず、ただ、救いの賜物と行く道を照らす光をあげようと言われているのです…。すべての人々に･･･この絵はそんなことを私たちに教えています。

主がたたいておられる私たちの心の扉の内側、そこは暗い闇の世界です。人生の虚しさに心を寒くし、重荷を負って苦しみ、人の言動に深く傷つく。世の中の不条理への言いようのない怒り、失望そして孤独･･･私たちの心を覆う闇は深まるばかりです。しかし、大丈夫なのです。かつて低く降り、命を与え尽くして私たちを救ってくださったあの主イエスが、今、私たち一人一人のところまで低く低く降り、私たちが閉ざしている心の扉をたたいてくださっている…。そして私たちが心の扉を開けるなら、無条件で私たちの心の中に入って来てくださるのです。ですから、主があなたをお呼びになる声と、心の扉をやさしくたたいてくださる音を聞き洩らしてはなりません。扉をたたいて下さる主イエスに向かって、私たちは心の扉を大きく開き、心の中に主イエスをお迎えして行きたいと願うものです。

（説教要約　羽入田悦子）